

Ⅵ 漁況海況予報調査

Ⅰ 調査目的

この事業は沿岸・沖合漁業に関する漁況・海況の調査研究および資源研究の結果にもとづいて予報を実施するとともに、漁況・海況情報を迅速に収集・処理することにより、漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図り、漁業経営の安定に役立てることを目的とする。

Ⅱ 調査内容

1. 調査期間 昭和50年4月～51年3月
2. 調査海域 日本海・津軽海峡・太平洋の青森県沿岸および沖合
3. 担当者 主任研究員 赤羽光秋
技師 十三邦昭
" 小田切譲二
" 木村大
臨時 永沢量
4. 調査船 幸洋丸(121.22トン D400馬力)
5. 東奥丸(134.47トン D550馬力)
瑞鷗丸(40.81トン D170馬力)
青鵬丸(19.94トン D170馬力)

5. 調査項目

(1) 海況調査(定線海洋観測)

- A 各層測温・塩検 0, 10, 20, 30, 50, 75, 100, 150, 200, 300, 400, 500 m
- B 魚卵, 稚仔採集及び査定
- C プランクトン採集及び査定
- D 気象観測 天候, 気温, 風向, 風力, 気圧, 雲量
- E 海象観測 波浪, うねり, 水色, 透明度
- F 見張調査

(2) 漁況調査

- A 県内主要9港(沢辺, 深浦, 鰺ヶ沢, 小泊, 三厩, 佐井, 大畑, 白糖, 八戸)における主要8魚種(スルメイカ, サバ, マグロ, ブリ, タイ, ヤリイカ, サクラマス, アブラツノザメ)について漁獲量を調査した。

6. 調査方法

- (1)は試験船により1・2月を除く毎月1回調査を行い分析及び整理は本場内で行なった。
- (2)は各地区担当の普及員から毎月報告を受け、必要に応じて電話又は現地におもむき調査した。

Ⅲ 調査結果

1. 昭和50年度の海況の特徴

(1) 日本海

対馬暖流の水温は、3～4月は各層とも平年並、5～6月は50・100m層で平年並、表層のみ2℃高めを示した。7月は100m層が平年並で、0・50m層が2℃低めに転じたものの

このあと8月から11月までは表層で2℃高め、50m層では平年並、100m2℃低めの状態が続き、年間を通じた特徴としては、表層の高めと下層の低めが目立っていた。しかし、51年3月の各層水温は、再び平年並に戻っていた。

対馬暖流の夏季の北上流量は、50年7月 2.1 、8月 2.9 ($10^6 m^3/sec$)で、41年～49年の9年間における平均値(7月3.0、8月3.5)の70～80%程度となっていた。

また、40年～49年の5～9月における対馬暖流水塊深度(7℃等温線の最深度)平均値は212mであるが、50年のそれは188mで水塊深度は平年よりも浅く、この傾向は51年3月にも現われていた。

以上から、日本海対馬暖流域における50年度の特徴をまとめると、表層水温の高めが目立った反面下層では逆に低めで、暖流勢力は弱勢であった。

(2) 太平洋

・ 津軽暖流

尻矢埼東方への張出位置は、6～10月の期間何れの月も $143.2^{\circ}E$ 付近で、平年並かやや広い程度となっていた。この水域の各層水温は、3・4月平年よりも1℃高め、6月平年並、7月平年よりも1℃低めに転じたあと、8月は表層で2℃高め、50m層平年並、100m層は2℃低めとなった。9月は表層2℃高めで50、100m層とも平年並となり、10～12月は各層とも2℃高めに推移した。年間を通じると表層水温の高めが目立っており、日本海の対馬暖流と共通した特徴を示していた。一方、尻矢埼線断面における夏季の水塊深度(10℃等温線の最深度)を見ると、50年は8月205m、9月340mで、昭和39～49年平均値(8月210m、9月243m)とくらべて、8月ほぼ平年並、9月はかなり深くなっており、この点对馬暖流域の特徴とは相反している。また、尻矢埼線における津軽暖流南下流量(夏季)は、50年7月3.0、8月3.5 ($10^6 m^3/sec$)で、41年～49年平均値(7月2.3、8月3.2)よりもやや大きな値を示しており、ここでも日本海側対馬暖流域の特徴と逆の傾向を示している。

以上から50年の津軽暖流域の特徴をまとめると、流域の張出しは平年並かやや広く、水温は表層の高めが目立ったほか各層とも高めの傾向を表わし、水塊深度及び南下流量とも平年よりもやや大きく、暖流勢力としてはやや強勢だったと判断される。これらの特徴において、流源となる日本海側対馬暖流域とは表層水温で高めを示していた点では一致しているものの、そのほかでは逆の傾向を示していた。

- ・ 例年襟裳岬東側の $143 \sim 144^{\circ}E$ から南西に延びる親潮第1分枝は、50年3月～10月及び51年3月にみとめられており、流路は例年と同じであったが、100m層における中心水温は、3月4℃台、4月5℃台、6月2℃台、7月6℃台、8月2℃台、9月6℃台、10月3℃台で、この期間内では例年より幾分高めに推移していたが、51年3月は1℃台でかなり低くなっていた。この水域の規模(面積)は例年よりもやや狭く、50年青森県沖における親潮第1分枝勢力はやや弱かった。

但し、51年3月は中心水温の低さと接岸の程度から考えて強勢になっていると判断される。

・ 黒潮分派

6月に鮫角東方の $143.5^{\circ}E \sim 145^{\circ}E$ に、100m層水温10℃台、塩分34.2‰台の黒

潮北上分派の先端部分が出現し、7～9月の期間ほぼ同じ位置に存続し、100m層の各値は、水温では7～9月12℃台、塩分は7月34.3‰台、8・9月34.4‰台で、月を追って特性が強まっている。10月になってこの暖水塊の位置は40㎞ほど東に移り、その先端は更に北上して42.2°Nに達した。10月の100m層水温と塩分は、12℃台、34.3‰台で、それ以前と値は変わっていない。この水塊の深度は500m以深に達し（6℃等温線）、近年出現した暖水塊の中では面積、深度等から規模は大きく、かつ北上位置が北の方に偏っていた。

2. 太平洋稚魚査定結果

昭和50年4～12月に採集された魚類の出現種類総数は科の単位を含めて26種であった。科の中には種類の同定ができなかった2～3種があり、その他に種の不明のものがあるので、それらを入れると種類数は若干多くなる。

出現したすべての魚類、頭足類の出現状況を見ると、1度しか出現しなかった魚種はアナゴ科（*Leptocephalus*）を初めとして11種がある。

出現回数・採集個体数の最も多いのはカタクチイワシで、総採集個体数の41.0%を占めている。又出現率も高く、総曳網数に対し約 $\frac{1}{3}$ の調査点で出現している。次いでアイナメ、イソギンボ科、ホッケが多く、上位4種で総個体数の70.4%を占める。

1網当りの平均採集個体数でもカタクチイワシが最も多く、6.6尾（1網の最高30尾）で、出現率も35.8%で最も高い。次いでメバル、ホッケ、アイナメ、イソギンボ科であるが、このうちメバルの出現率は1.8%と低い。出現率が高いのはイソギンボ科、アイナメ、ススキハダカ、ホッケであり、14.8～11.1%であった。

3. 漁 況

(1) 日本海

沿岸漁場における夏季および秋季のスルメイカ漁は風に恵まれたことと漁獲努力量の増加などで夫々平年を上廻り、夏イカは3,027トン、秋イカは1,314トンの漁獲をあげた。しかし、明洋海山などの沖合海域では好漁場は全く形成されず、例年の $\frac{1}{5}$ の280トンの水揚げよりなかった。一方、定置網ではブリ、マダイ、は平年をやゝ下廻った程度であったがマグロは極端な不漁であった。しかし、マサバ、マイワシは近年になく高い来遊量水準を示していた。

(2) 津軽海峡

大畑近海の夏イカ漁獲量は5,568トンで48・49年よりやや多かったが秋イカ漁獲量はここ5ヶ年間で最低の1,136トンにとどまっている。しかし、他海区からの搬入イカ水揚げ量は凍結船の入港艘数の増加などで、これまで最高の7,513トンに達している。

(3) 陸奥湾

後潟の定置網におけるマサバ漁は4～8月までは例年と比較にならない、大量の乗網がみられているが9月以降著しく少く、総体的には昨年の $\frac{1}{3}$ 位の53トンの漁獲に終わった。

マイワシ漁は631トンと近年にない大量の漁獲をあげ、特に6月が好漁であった。

(4) 太平洋

八戸近海の夏イカ漁獲量は、4,216トン、秋は400トンで48年に次ぐ凶漁であった。

また、中型氷蔵船の搬入イカは5,077トンで昨年を上廻ったが平年より下廻っている。凍結船は着業船などの増加でこれまで最高の4,6000トンの漁獲があった。なお、近海イカ不振のた

め、アカイカに依存する船が増加し、八戸港には中型氷蔵船で1,943トン、凍結船で9,832トンの陸揚があった。マサバは道東沖で38,045トンが揚がり47,48年よりかなり下廻ったが、三陸沖漁場での水揚げは220,000トンで46年に次ぐ好漁である。

（詳細は漁海況報告書参照）